

『日韓ユースキャンプ―東アジアの100年を学び対話する―』 最終報告書

在日コリアン青年連合(KEY)東京
代表 金朋央

1. 本事業の目的

2010年は韓国併合条約締結から100年目という年でしたが、未だに日韓間での歴史認識の差異から生み出される溝は埋まっていない現状があります。朝鮮半島にとってこの韓国併合条約締結は、朝鮮の主権が決定的に奪われた象徴的な事象であり、忘れがたい歴史となっています。そしてその後始まった日本への植民地化により様々な悲しみが生み出されましたが、その傷は未だに消えないまま日本と朝鮮半島に横たわっています。近年韓流ブームで日韓の文化交流は進む一方、この歴史認識の差異から未だに真の相互理解は進まないままです。

在日コリアン青年にとっては、既に四世・五世が生まれている状況でありながらも日本の中で生活の息苦しさを感じてしまう部分もあります。また自分のアイデンティティについても日本と朝鮮半島の中で揺れ動いてしまいます。そして日本で生活してきた在日コリアン青年の中には、自分たちの背景にある歴史性を意識しながら、日本と朝鮮半島に横たわっている溝に心を痛めることも少なくありません。

日本青年にとっては、教科書や学校教育で日本と朝鮮半島のことを学ぶ機会はあまりに少なく、なぜ日本と朝鮮半島の間には溝があるのかさえも知らない青年も多い状況です。そのことがより一層日本と朝鮮半島の溝を大きくすることになっています。

2010年は前述したように、韓国併合条約締結から100年という節目の年にあたり、日本と朝鮮半島の中であらためて歴史認識について考える機運が高まりました。それぞれの市民社会の中で運動を展開しながら、双方が相互協力・連帯していく動きもありました。私たちは、そのような状況の中で、日韓両社会の今後の中心を担っていく若者世代こそが直接参与する形で、双方の持つ歴史と現状について学び、考え、認識を共有し、未来のあるべき姿について一緒に発信できるような具体的な実践を行なうことが有意義且つ重要であると考え、本事業『日韓ユースキャンプ―東アジアの100年を学び、対話する―』を企画し、実行しました。

全体の目的としては、以下の2点を掲げました。

- ①歴史問題を抱える日韓間において、表層的ではない両国間の相互理解を行なうために、歴史問題の現場を両国の青年が共同で訪問して見聞を同じくし、その共通経験を土台にして、双方が持つ認識や思いを議論することを大切にする。「自分はこう考える」という枠組にとどまるのではなく、現場性や当事者性を踏まえた上で生産性のある批判や提案を行なえる議論関係を目指す。
- ②韓国併合条約から100年といった場合に、両国の歴史問題のみに注目が集まりがちだが、本事業は、

歴史問題にも当然接近しながら、この 100 年の歴史を幅広く捉え、朝鮮半島の南北分断や日朝関係、核兵器問題といった東アジアの平和に関わる問題や、在日コリアンをはじめとしたマイノリティの人権など、関連する様々な社会 이슈 にアプローチする。

日韓の間には様々な問題が存在していますが、とくに、「歴史」「平和」「人権」という 3 つのテーマを置いて、それぞれに趣旨を持って、具体的なプログラムを企画・実施しました。

2. 本事業の方法

具体的には、東京とソウルの両方でプログラムを連続で行なうという手法を取りました。前述の歴史・平和・人権という 3 つのテーマに基づいてそれぞれフィールドワークを行ない（実際にソウルでのプログラムは、歴史と平和の 2 コースとなりました）、その共通経験を基にした討論会とワークショップを行ないました。また参加者全体で講演会、フィールドワーク発表会を行うことで、全ての参加者間での経験の共有を図るとともに、学ぶだけではなく発信することも重要であるという思いから街頭でのアピール行動を行ないました。また、ソウルプログラムではとくに植民地支配および戦争の体験者からの証言に重きを置いたプログラム構成を取りました。

全プログラムを通じて、参加者が経験と学び、対話、そして実践という一連のプロセスを、東京とソウルにて実行することを強く意識して事業を進行しました。

3 つのテーマにおけるコースのコンセプトと方法については、以下の通りです。

(1) 歴史コース

戦争での被害、加害の両方の視点に立ち、お互いの歴史についてより深く理解することが重要だと考え、戦争の加害と被害の両方の場所を見学し、あるいは講演を受けるプログラムとしました。そして、歴史に向き合う上では、まず実際にあった事実を真摯に受けとめることが第一義的に必要と考え、戦争体験者の方々の証言を聞く機会を積極的に設けました。その上で参加者同士が十分な時間を持って対話しながら互いの歴史を理解し、差異と共通点について認識を共にしながら、これからの未来を考えることにつなげるようにしました。

(2) 平和コース

朝鮮半島と日本をはじめとする東北アジアの安全保障（狭義の意味での平和問題）は現在多くの問題を抱えていますが、とくにこの地域で問題となっている核問題に重点を置きました。また、戦争責任の問題とも深く関わりますが、実際に戦争を体験した当事者から、戦争とはどういうものかを聞き、具体的にその極限的な無残さ、悲惨さを想像する時間を持つことにしました。また朝鮮半島の分断においてもその現場を見聞きすることにより、戦争のもたらす現状を考えるようにしました。それらを通じて、「戦争は起こしてはならない」という「一般論」をよりリアルな認識で信念として持てるよう強化することができないか、という問題意識を持ってプログラムを企画することに努めました。

(3) 人権コース

今回は韓国併合 100 年という主題を受けて、日本では“在日コリアン”に焦点を置き、在日コリアン社会の 100 年間について取り上げました。日本に多く存在しているのに未だ意識されることが少ない在

日コリアンの歴史性と現在を学び考えることで、今の日本の人権状況について再考しなおすとともに、両社会に横たわる外国人・民族的マイノリティの問題にも視野を広げ、互いの理解を深くすることを目標としました。ソウルプログラムでも、同様のコースを設けようと模索しましたが、準備段階での力不足もあり、東京プログラムのみでの実施となりました。

3. 本事業の準備・実施経過

今回は日韓の若者が共に参加するプログラムであるため、在日コリアン青年により構成される（ただし日本国籍者を多数含みます）本会のみで進めるよりは、趣旨に共感する日本および韓国の若者グループとの共同実施を課題化しました。そして、日本で大学生を中心に“軍縮平和”と“歴史対話”の問題に取り組む NPO 法人「セイピースプロジェクト」と、韓国の代表的な青年団体の一つである韓国青年連合（KYC）との共催が実現しました。KYC は本会の姉妹団体でもあります。

本会が準備プロセスのコーディネートを担う中で、2010年4月より準備会合を定期的に行い、5月には韓国から KYC の実務者 2 名を日本へ招聘し、3 団体合同の会議を行いました。参加者募集の広報を 6 月から開始し、7 月 17 日には日本側参加者の日韓ユースキャンプ事前オリエンテーションを行いました。韓国側でも同時期に事前教育の集まりを持ちました。また各団体毎に、韓国併合 100 年に関連する諸テーマについての勉強会を行いました。本会 KEY でも併合 100 年の歴史を学ぶ勉強会や、在日コリアン一世の歴史学者の先生をお招きしての講演会、サハリン残留韓人当事者であるハラボジ（おじいさん）の話聞く会など、月 1 回のペースで学ぶ機会を持ちました。

8 月 2 日～9 日の日韓ユースキャンプが終了した後は、9 月 11 日に日本側参加者による日韓ユースキャンプ評価会をセイピースプロジェクトと共同で行い、参加者による感想・意見を集め、本事業の補完作業を行いました。同じ頃、韓国側でも KYC が参加者による評価会を行なっています。

その後、11 月下旬にソウルで開催された本会と、KYC ソウル支部との共催行事に参加する際に KYC 側実務担当者と直接行事評価を行ない、それを以って 12 月 24 日に日本側実務担当者（本会と、セイピースプロジェクトの担当者）同士で本行事への最終的な評価会を再度行いました。今回の日韓ユースキャンプの評価点や反省点を整理した上で、今回の事業実施における意義を再確認し、来年（2011 年）の事業実施の可能性について、今後の宿題とすることで合意しました。年が変わり 2011 年 2 月 26 日に本会の代表者が渡韓する際に、韓国 KYC 側の実務担当者と話し合いを持ち、12 月の日本側実務担当者評価会で出た意見を韓国側実務者とも共有しました。2011 年 3 月現在も、今年の事業実施について、大枠で実行することを目標にしながら、対話・協議を続けています。

4. 本事業の実施内容に関する報告

以下、8 月 2 日から 9 日にかけて行なった本番の各プログラムに関して簡単に報告します。

一番初めのプログラムとなる開幕式（8/2）では、この行事のためにセイピースプロジェクトが制作した、在日朝鮮人一世と日本人被爆者の方の証言インタビュー（VTR）を上映しました。在日一世の方から本名を作ったときの状況などや、被爆者の方から被爆されたときのことなどについての話を前にして、

参加者全員が証言の重さを身体で感じる時間となりました。

次に、これもセイピースプロジェクトが行なった、日本高校生・大学生 700 名に対して韓国併合 100 年に関連するアンケート調査の結果を報告し、現在の日本の若者世代の認識について考えてみる時間を持ちました。このアンケートは、韓国・朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）へのイメージや戦後補償について、原爆のことや朝鮮学校高校無償化についてなど 9 項目の質問があり、現在日本の学校に通う若い世代の考えがどういう傾向にあるか、一側面を知ることができました。たとえば、北朝鮮への否定的なイメージが 9 割を超えていた一方で、朝鮮学校が高校無償化から除外されている問題に関しては 4 割強が無償化すべきと言っている結果が出ました。また広島・長崎へ原爆投下された年月日や太平洋戦争が終わった年月日を知っている人はそれぞれ 6 割を超えていましたが、韓国併合条約の締結日を年月日まで知っている人は 6%に留まりました。その後、3 つのグループに分かれて、自己紹介を兼ねた意見交換会では、このアンケート結果に対する多様な意見が出されました。先述したように、北朝鮮へのネガティブなイメージが圧倒的に占めながらも朝鮮学校高校無償化除外については人道的観点から無償化すべきという意見が多かったことや、原爆などの日本の被害についての知識はありながらも韓国併合条約という加害についての知識はほとんどないという結果は、現在の日本の状況をよく反映しているのではという意見が出る一方で、韓国ではどのような結果になるだろうか想像する意見が出るなど、両国間に横たわる歴史問題や日韓関係に対してそれぞれが持つ認識をよく知る時間となりました。

翌日 2 日目(8/3)は、3 つのテーマに分かれたフィールドワークを実施しました。

(1) 歴史コース

まず午前、平和遺族会全国連絡会代表の西川重則氏の案内の下、靖国神社の境内や遊就館を見学しました。靖国神社がアジアの各国との摩擦の原因になっている所以や問題点を中心的に学びながら見てまわりました。参加者たちは靖国神社を訪れたことのない人も多かったですが、訪れたことのある人の中でも靖国神社がなぜ日本とアジア諸国の間で対立の争点になっているのかその問題の内実を知らない人が多く、この歴史認識の相違について根本的に見つめなおす機会になりました。付設されている遊就館を見学した際、通訳がきちんといましたが、遊就館の中で固まって行動し、案内の方の説明を通訳するという形は難しく、韓国側参加者にとっては内容が十分に理解できなかったという問題点もあり、教訓として残りました。

次に民間が運営する歴史資料館として、新宿区早稲田にある「wam（女たちの戦争と平和資料館）」を訪れ、職員の方からのレクチャーと案内の下、日本軍「慰安婦」問題について学びました。参加者の中には、靖国神社の規模に比べ wam の規模があまりに小さいことに衝撃を受け、伝えたい歴史を伝えることの難しさを痛感する形となりました。一方、日本の高校生が元日本軍「慰安婦」の問題について自分たちで調べ発表したノートを見て、「一体自分たちは何をやっていたのだろうか？自分たちにもできることがあるはずだ。」と真剣に考えるようになったという参加者の声もありました。

次に wam に隣接する早稲田奉仕園という会館にて、中国帰還者連絡会の坂倉清さんから、元日本軍兵士として戦争に加わった頃についての証言と、その上で「認罪」ということについて講演をしていただきました。一部参加者の中には「加害の認罪」という難しいテーマに頭が混乱したと言っていた人も

いましたが、次の日に行われた感想会ではこの「加害と認罪」について参加者間で積極的な議論が交わされました。

(2) 平和コース

最初に、文京区本郷にある「わだつみのこえ記念館」を訪れ、館内を見学した後、元ひめゆり学徒隊で沖縄戦の体験者である上江田千代さんから、沖縄戦の体験についてお話していただきました。その証言は生々しくまた衝撃的であり、参加者の印象に強く残ることとなりました。一方で、今現在戦争状態ではない日本とは異なり、世界にはまだ戦争状態の国がたくさんあるということについても触れられ、現在の問題としての戦争、そして平和について考える時間となりました。

その後、江東区夢の島にある「第五福竜丸展示館」を見学しました。館職員の方に案内してもらいながら、第五福竜丸事件の詳細とともに、核がもたらす人体へ深刻な影響などその問題点について学びました。そして平和 NGO「ピースデポ」副代表の田巻一彦さんから「これからの北東アジアと非核兵器地帯構想」という題目で、今後の非核化への展望について講演をしていただきました。この核の問題が過去のことではなく、今現在続いている問題として捉え直すことができ、そして今後どういう方向性があり得るのか、という未来に対しての視点を持つことができました。とくに現在の北東アジアは様々な面で核問題を抱えており、決して他人事ではなく、身近なこととして参加者が考えることができたこと、また日韓の参加者が、相手国において核問題がどのように捉えられているのかをよく知る機会になったことが成果として挙げられます。

(3) 人権コース

最初に港区麻布にある「在日韓人歴史資料館」を見学しました。館職員の方の詳細な説明をもらいながら展示物を一覧した後、同資料館研究員で在日コリアン二世の羅基台さんより、在日コリアンの歴史と現状について、ご自身の体験も加えながらお話していただきました。在日コリアンにとっては、自らは何者かという意味でのアイデンティティ、そして名前や国籍が非常に大きなテーマとなっていることを日韓の参加者がよく知る機会になったと思います。

その後江東区枝川にある東京朝鮮第二初級学校を訪問しました。この学校は校舎および敷地の所有権をめぐる東京との間で裁判となり、学校側が低額で土地を購入するという形で和解したという経緯がある学校です。同校の前校長であり、現在新校舎建設委員会事務局の宋賢進さんから、学校周辺の街を歩きながらこの地域の在日コリアンの生活史について説明を受け、同校にてこの朝鮮学校や民族教育について講演を受けました。

夕方からは、若い世代となる在日コリアン三・四世のアイデンティティについて、二名の当事者から様々なテーマについて話を聞くことを中心とした座談会を行いました。参加者、とくに韓国側の参加者からさまざまな質問が投げかけられ、予定時間を超過する形となりました。

ただ、このプログラムに参加した在日コリアンの参加者は1名のみで、もっと多ければ、参加者にとって在日コリアンの問題がもっと深い形で知ることができたと思われれます。その点で残念だったという所感が残りました。

東京プログラム3日目(8/4)は、午前中に前日のフィールドワークコースごとに分かれて、参加者間の

意見交換を行ないました。逐次通訳ということもあり、時間は3時間と余裕を持った設定としましたが、3つのうち2つのコースは話が終わらず、時間を若干超過するまでになりました。この時間をより濃密なものとするためには、言語面に対するフォローをもっと強化することが求められることを感じました。具体的に言うと、1コース15名程度の参加者で構成されていましたが、通訳協力者をもっと集め1コースの参加者をさらに2つに分けて意見交換することも一つの選択肢だったと思います。

午後には、3つのコースで知り学び、また午前の意見交換会で交わした意見などを全体で共有する全体報告会を行なった後、国際交流を行い続けている民間団体「ピースボート」の共同代表のお一人である野平晋作さんをお招きして「東アジアの平和実現に向けた日韓青年・市民・NGOの課題」というテーマでレクチャーをしてもらいました。とくに、これからの日韓の青年世代ができることは何か、という具体的な行動の可能性について強調されたお話となり、参加者が今回学んだことを今後どうつなげていくかということを考える上で有益なレクチャーになったと考えています。

その後、参加者自身が学び感じたことを外に発信することの大切さを体験しようと、新宿駅前でアピール行動を行ないました。事前に制作しておいた、韓国併合100年という歴史事実を喚起するポストカードを通行する市民らに配布するとともに、韓国併合条約が締結された日(8月22日)を質問する街頭アンケート調査を行なうという手法をとりました。なかなかポストカードを受け取ってもらえないということにショックを受けたり、逆にアンケート調査の呼びかけに積極的に反応してくれた人たちがいることに喜んだりなど、実際に参加者が発信することの大変さや大切さを感じる良い機会になったといえます。その後、東京プログラムの最後の時間として、懇親会を兼ねた感想交換会を持ち、翌日のソウルへの移動に備えました。

4日目(8/5)は、午前を自由行動とし、韓国側参加者にとっては少しの間ですが東京観光をする時間となりました。午後に日本側、韓国側が別々で(航空運賃の関係で、双方で別途航空券を手配したため)東京からソウルに移動しました。

ソウルプログラム初日、全体としては5日目(8/6)となる日は、一日かけて植民地支配、戦争被害者と接し、声を聞くという時間としました。

まずはじめに、元日本軍「慰安婦」とさせられた方々が共同で生活している「ナヌムの家」を訪れました。そこには日本軍「慰安婦」歴史館が付設されており、最初にそこを見学しました。とくに今回初めてナヌムの家を訪れた人がほとんどの日本側参加者は神妙な面持ちで歴史館を見学し、説明に深く耳を傾けていました。その後元日本軍「慰安婦」のハルモニ(おばあさん)たちと交流する時間を持つことができました。日本語を流暢に話されるハルモニたちに接して、複雑な思いをしたという参加者が多くいました。

その後ソウルプログラムの宿舎となるソウル・ユースホステルに戻り、別の元日本軍「慰安婦」のハルモニと、在韓被爆者の曹昌根ハラボジの証言を聞きました。そのあまりの壮絶な証言にショックを受けた参加者も多く、戦争の恐ろしさと残忍性、未だに残る心の傷を思い知らされるとともに、証言を聞くことの大切さのみならず、聞く側に迫ってくる責任性などについて広く思いを至らせるきっかけとなりました。

6 日目(8/7)は、歴史・平和の 2 コースに分かれてフィールドワークを行いました。

(a) 歴史コース

歴史コースは、日本の植民地支配時につくられ、戦後も 80 年代後半まで使用された「西大門刑務所」を訪れ、日本の植民地支配に関する展示物に見入るとともに、案内の方から、戦後も韓国社会において民主化運動を弾圧する上での施設として機能したという歴史について説明をもらいました。またこの館長からも詳細な説明を受けました。その後、朝鮮戦争をはじめ、朝鮮半島における戦争の歴史などを展示した「戦争記念館」を訪れました。3 月に韓国西海沖で起きた哨戒艦（天安艦）沈没で犠牲になった韓国軍兵士らの名前が刻まれた碑もあり、朝鮮半島が今も休戦状態で、戦争から完全に解放されていない現実を実感する時間ともなりました。

その後宿舎に戻り、「民族問題研究所」という民間団体の朴漢龍さんから、韓国併合 100 年に対する韓国社会の反応などに関する講義を受けました。夕食後に、参加者間で感想・意見を交換しました。

(b) 平和コース

平和コースは、写真家で有名な李時雨さんに終日案内してもらいながら、都羅山駅、南北出入事務所、都羅山展望台、第 3 トンネル、臨仁閣と、様々な場所を巡りました。南北分断の状況、南北統一への困難さをまざまざと見せつけられたような一日だったと言えます。夜に行なった参加者の感想会では、北朝鮮側を一望できる、いわば南北分断を実体験できる都羅山展望台への意見も様々でした。南北分断の象徴として重く捉え観光名所のようになっていることに対して違和感を持った在日コリアンの参加者がいたり、分断された家族に会いたいと涙を流した北朝鮮出身で現在韓国で生活する青年もいて、日本側参加者にとって、隣にいるこの青年たちの率直な思いに触れることで、南北分断が決して他人事ではない、リアリティを持ったものとして感じられたのではないかと思います。

7 日目 (8/7) は、東京プログラム 3 日目と同じく、全体で学び、対話と行動共に行なう一日としました。午前中に聖公会大学教授の権赫泰さんから、若い世代が新しい未来をつくることについての講義を受けました。そこではこれまでの日韓市民交流の歴史を捉えた時に、決して「和解」につながるような明るいものばかりではなく、多くの困難を抱え、多くの挫折があった道のりであったという厳しい現実に対する指摘がなされ、今回の事業がどのような意義を持つものになるのか、主催者含めてあらためて深く考えさせられる、貴重な時間となりました。

午後には全体ワークショップとして「東北アジアの平和の障害になっているもの」について、参加者全体で意見を交わしました。ここからは、ちょうど別のプログラムで韓国を訪問していた本会の兵庫県のメンバーが合流し、全体で 70 名以上となりました。今回の一連のプログラムを通じて各々が感じたことを整理しながら、「東アジアの平和を阻害している要因は?」「それを解くために必要なことは?」という 2 つの質問を提示して、3 つの班に分かれてディスカッションを行ないました。その討論で出た結果を外に発信するために、どのような方法を取るかということから参加者同士で話し合いで決め、メッセージを記したパネルやデコレーションなどを共同で制作し、明洞と仁寺洞という人通りが多い場所に移動して、街頭アピール行動を行いました。その後、最後のプログラムとなる閉幕式を行ない、全プログラムを振り返る時間を持ちました。その日は最後ということもあって、日本側と韓国側の参加者が

一緒にソウルの各所を観光したり、朝まで話をする人たちもいて、交流していました。

8日目(8/9)は、日本側参加者の航空便が午前発だったため、朝早くに宿舎で別れを惜しみながら、日本側参加者が帰路につきました。

4. 本事業の成果・反省点

今回、本事業の参加者は、東京・ソウルプログラムとも30名以上の参加者を目標としていました。実際には、全日程参加者は日本側参加者(在日コリアン、韓国からの留学生含む。以下同じ)17名、韓国側参加者(日本からの留学生含む。以下同じ)22名にとどまりましたが、部分参加者を含めると日本側38名、韓国側39名、東京・ソウルプログラムともに50名を超える参加者の下で本事業を行うことができました。

とくに日本側・韓国側参加者共に大学生が大部分を占め、本会会員以外は、このような日韓青年・市民交流に初めて参加した人たちがほとんどでした。とくに韓国側参加者の中には当初日本に対して悪いイメージを持っていたが、それが大きく変わったという人もいたりなど、本事業をきっかけに日韓の参加者間に友情が生まれ、交流を通じて相互理解が進んだといえることがたくさん見受けられました。また参加者の多くは、本事業により初めて日韓に横たわる歴史問題をはじめ、戦争と核の問題、さらには在日コリアンの問題に触れたといい、今後も継続して学んでいかなくてはいけないと感じたという参加者からの感想も多く聞いています。

本行事終了後にも、日本側では、東京・豊島区で行われた韓国併合条約100年市民集会に参加した人がいたり、また韓国側でも元日本軍「慰安婦」問題の解決を求めて毎週水曜日に日本大使館前で行なわれている「水曜集会(デモ)」に初めて参加した人がいたりなど、本事業申請書の「2. 期待される成果-(2)長期的な展望展開」の箇所にて記述した、「日韓の市民交流にとどまらず、歴史理解の進展など今回アプローチする諸テーマに関連した市民活動・ボランティアを志す人の輩出する」という目標の最初の足がかりはつくれたのではと考えています。しかし、それをより着実なものとするためには、本事業の前後の時間の使い方が非常に重要であると考えています。つまり、事業実施前の事前学習をより充実させることと、終了して以降に評価会のみならず、フォローアップ的な学習プログラムの設定など、中期にわたって参加者が参与していくような「線になっているプログラムづくり」という視点が必要と感じました。

また、戦争被害を受けた当事者の証言に対して、あたかも分析対象のサンプルかのように扱っているかのように受けとめられるような参加者の発言があったことは、主催者のみならず他の参加者、また証言に協力くださった当事者やその支援者の方々に大きな波紋を投げかけるということがありました。難しい課題ですが、私たちが向き合っているのは客体的な事物ではなく、生命を持つ人間存在だということへの深い自覚や、そこから導き出される最低限の礼節や心構えについて、参加者があらかじめきちんと意識し考えられるような機会提供をすることの重要性を痛感しました。

本事業では学びを詰め込むのではなく、参加者間の討論・対話の時間を十分に確保し、参加者が主体的に考えるような時間を持てるようなプログラムづくりを心がけました。しかしそれでも参加者からは、もっと対話ができればよかったという意見も聞かれました。議論の時間の中でどうして

も通訳にかかる時間が多く、その部分についての準備は、過去に行なった事業の経験から強く意識していたのですが、もっと予算配分も多くすることも合わせて、より十全な体制を取ることができれば尚良かったと考えます。ただ総合的に見て、通訳に関しては、韓国からの／日本からの留学生の献身的な助けにより、かなり円滑な対話・議論が保障できたと、通訳協力者に大きく感謝しています。

大きな反省点として、申請書にはマスメディアへの積極的なアプローチを挙げておりましたが、結果的には主催者が想定するような成果を得ることはできませんでした。主要新聞社等にプレスリリースを送付するなど行ないましたが、事前広報含めて取り上げてもらうことができませんでした。実際に参加者獲得のための広報活動と比べてメディア対応は十分な行動が取れなかったことが反省点として挙げられます。とくに日本側プログラムを準備した本会とセイピースプロジェクトが双方ともメディア対応の経験、ノウハウの蓄積が少なかったことが影響したと思います。それを克服するための事前の調査・準備に力をかけるべきでした。ただ韓国側で「ウィークリー京郷」というよく知られた週刊雑誌に報告記事が掲載されたことと、日韓、そして在日の若者主体による事業という性格が目をついた形で、日本の中で最大手の労組である自治労の機関誌に報告記事を掲載できたことは小さくない成果であったと考えます。

5. 今後の課題

本事業を終えて、日韓の間に横たわる問題を一回限りの行事で消費するのではなく、行事を継続しながら、参加者が自分で積極的に関わっていくということが重要だと考えます。その問題意識と、今後も同様の事業を行なっていくという意志の方向性は、今回共催した3団体間で共有しています。現在、今年（2011年）も同様に若者対象の参加型プログラムを行うということを現在3団体間で議論している段階です。実施が決定されれば、今回の事業に参加した人たちに、企画段階から参与するよう積極的にアプローチすることを考えています。一度経験したことのある人たちが企画段階から議論に加わることで、今回の本事業の反省と成果を活かし、より充実した成果を得られる事業にできるのではないかと期待しています。

また、本事業の参加者の主ターゲットを大学生としていた関係上、参加者獲得の面において事業参加費をある程度低く抑えることを非常に強く意識しました。その点で、貴財団をはじめ助成金を受けられたことは、参加費を一定程度低く抑えることができたと同時に、ソウルプログラムには主催側がプログラムの構成上、ぜひ参加をお願いしたい（歴史問題に関して日本側の状況について詳しい大学院生や、同時通訳のスキルを持つ通訳者など）人に参加してもらうことが非常にやりやすくなったという点で、大変大きな効果がありました。今回は貴財団からの支援をはじめとして助成金を獲得することによって金銭面で円滑に進行できましたが、資金確保は当然事業の円滑な進行にとって欠かせない課題です。数十名規模で、複数言語を使用する青年交流事業を行なう場合、全ての支出を参加者の参加費と主催側でまかなおうとすると負担が非常に大きくなってしまい、実施が難しくなります。支出を抑えるという努力は常にしながらも、寄付金・協賛金の獲得を含めて、参加者や本会以外からの資金をどう確保するか

については、今後も十分な検討・準備過程を置いて、しっかり取り組むことが不可欠と考えています。

この度は貴財団からの助成に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。一方で本報告に関して、本事業のメインとなるプログラムは8月上旬に終わりましたが、その後参加者の評価会の実施や、とくに他の共催2団体と評価意見を共有することに結構時間がかかってしまい、本報告が遅くなってしまったことをお詫び申し上げます。大変申し訳ありませんでした。

今後も若い青年世代の意義のある日韓市民・青年交流と学びの場を、若者が自ら主体的につくりあげていきたいと考えております。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。